



写真：成島八幡神社（米沢市）

いわずとしれた政宗最大の腹心

成島八幡神社の神職の家に生まれた景綱は、政宗の父である輝宗によって、十歳年下の政宗の傅役(もりやく)として抜擢されました。

ときに苛烈ともいえる景綱の教育により、政宗は、しだいに文武の才と帝王学を身に着けていきます。

政宗の見えなくなった右目が飛び出してきたとき、輝宗が近侍の者に突き潰すことを命じましたが、誰も怖気づいて従いません。

景綱は、小刀で突き潰す役を引き受けました。(『性山公治家記録』)

二人の信頼関係をあらわす有名なエピソードです。





写真：「片倉景綱木像(耕徳寺 石巻市広淵)」

政宗への直言も辞さず

また、こんなエピソードもあります。

徳川政権も固まった政宗の晩年の話です。

寄合の席で、政宗の肩衣が、徳川家の旗本の膝にかかりましたが、政宗は、無視して素通りした。

怒った旗本が、扇を抜き、政宗の顔面に殴りかかります。

政宗は、その後、帰ってきた景綱に「小身衆に、本気になることではないので、軽くないましたよ」と一部始終を語ります。

景綱は、「もっともですな。しかし小身衆に無礼を働いたりしないよう、もっとお慎みください」と答えたという。

この喧嘩未遂事件は、細川忠興の手紙にも残っており、実際にあったと思われませんが、話の筋にはいろいろバージョンがあり、景綱のコメントがあったかも、真偽は不明です。

しかし、政宗に歯に衣着せぬ物言いができる景綱の立場と、なにより景綱の政宗に対する忠心を表しているような気がします。

そんな景綱だからこそ、政宗も終生、信頼を置いたのでしょう。

